



**動物：**日本ネコ，雄，2才。

**臨床的事項：**昭和55年7月末頃から視力低下，被毛粗剛となり，削瘦が目立つようになった。8月25日，A動物病院に入院。体重4.0kg，両腎と脾の腫大を触知した。9月11日，右腎を摘出（提出標本）。10月11日，安楽死，直ちに病理解剖。体重3.1kg。入院以後安楽死までの全期間にわたり削瘦，貧血，倦怠，視力の低下，40℃以上の体温の持続，BUN値とCreatinine値の上昇を認めた。

**肉眼所見：**黄色半透明で，弱粘稠性の腹水を約6ml認めた。

右腎は黄白色を呈し，高度に腫大。被膜は高度に肥厚し，表面に直径5～10mm大の類円形の隆起を多数認めた。断面においても，主として皮質に直径2～10mm大の類円形の白色結節を多数認めた。

左腎は黄白色を呈して硬く腫大し，表面に直径5～10mm大の類円形の隆起を多数認めた。被膜の剝離困難。断面においても皮・髓両質にわたり直径2mm大の類円形の白色結節を数個認めた。肝，右副腎，脾，大網，左腎門・肝門リンパ節，肺および心臓の表面と断面には直径2～

5mm大の白色または黄色の結節が散在していた。前眼房水は混濁し，汚白色の凝塊を認めた。

**組織所見：**右腎においては，主として皮質に境界が明瞭な肉芽腫性病巣を多数認めた（写真1，HE，×20）。この病巣は中心部に壊死がみられ，それを囲んで単核細胞の増殖巣があり，さらにその周囲には形質細胞を主体としたリンパ系細胞の浸潤層を認めるものが多かった（写真2，HE，×200）。病巣が癒合しているものや，中心部に壊死をともなわないものも多く認められた。このような肉芽腫性病巣は肥厚した被膜にも線維素の沈着とともに認められた。

左腎には，主として皮質にリンパ肉腫の病変が観察された。肝，右副腎，大網，肺，心臓などにおいても明瞭な肉芽腫性病巣が認められた。

**診断：**ネコ伝染性腹膜炎による壊死をともなう肉芽腫性炎。

なお，本例はネコ伝染性腹膜炎とネコ白血病の重感染が血清学的にも認められている。